



カンボジア王国の 過去と現在

駒井 隆夫



アンコール遺跡 全盛期にはインドシナ半島の大部分を勢力下に置く大帝国として栄えたアンコール朝の遺跡は、数世紀にわたって人知れず熱帯の樹海深く埋もれていた。

神秘のベールの中から再び雄姿を現した遺跡は長年の風雨に曝され、また巨大なガジュマルの気根が絡みつき、今ではアンコール遺跡の一部が崩壊の危機に直面している。

クメール芸術の神髄ともいわれる第一回廊の壁一面に描かれた浮き彫りの彫刻には目を見張らせるものがある。ラーマヤナなど古代インドの叙事詩が絵巻物風に展開され、私たちをヒンドゥーの神話の世界に誘ってくれるのだ。見学を終えたときには、辺りは既に薄暗く、高く聳えるアンコール・ワット中央塔が茜色の空に金色に輝き、やがて周囲の喧噪と共に密林の闇に呑み込まれていく落日の光景を眺めながら、アンコール朝の興隆と滅亡の歴史に思いを馳せるのだった。

プノンペン近況 14年振りに訪れたカンボジアは大きな変貌を遂げていた。首都プノンペンの主要な道路は車やバイクで混雑し、中心街はビルやホテルの建設ラッシュである。

百貨店では、一般労働者の月収の何カ月分にも相当する高価な日本製のTV、ステレオ、冷蔵庫などの家電製品に人気が集まっていた。マーケット周辺では露店なども多数出店して活気に包まれ、生活臭が強く漂うエリアとなっている。夜になると、色とりどりのネオンが夜の街を艶やかに装っていた。

一方で、観光客に絵はがきや土産物を勧める真剣で、訴えるような子供達の眼差しを見ると、厳しい生活模様が垣間見る思いで、複雑な心境にならざるをえない。

カンボジアの失業率は30%と高水準で、ある縫製工場の求人に200人以上の人が職を求めて早朝から列を作り、開門を待っている光景は深刻な雇用情勢を窺わせている。

市内見学の後、プノンペン大学の図書館を訪ね、館内を見学させてもらった。学生数1万余の大学は蔵書数が約7万冊で、ポル・ポト政権時代に貴重書



クメール文明の至宝 アンコール・ワット

など多数の蔵書が廃棄されており、今後の充実が課題のようだ。一日あたりの図書館利用者は約500人程であるが、閲覧室で学生が脇目もふらず読書や勉強に勤しんでいる姿が印象的であった。

ポル・ポト政権時代 1975年4月、極左共産主義のクメール・ルージュがプノンペン入城を果たし、その直後から恐怖政治が始まるのである。クメール・ルージュのポル・ポトが実権を握ると、都市住民の農村への強制移住、通貨や学校教育の廃止、宗教の禁止など、従来の価値観や伝統文化、社会体系などを全く無視した極端な政策によってカンボジアは再び不幸な運命を辿ることになる。

ポル・ポト政権時代の3年9カ月の間に、知識人や資産家を初め、階級敵と見なされた人々は全て処刑の対象とされ、農村での過酷な強制労働の結果死亡した人を含めると、当時のカンボジア人口の約4分の1が殺害されたといわれている。私を案内してくれたガイドも、家族の4人がポル・ポトに殺されましたとしんみり語っていた。

この度訪れたプノンペンのトゥール・スレン刑務所には、収容者の顔写真や拷問器具、犠牲者の頭蓋骨や衣服の山が展示され、ポル・ポト政権虐殺の実態を後世に伝える資料館として保存されている。

こまい たかお (図書館・参事)

本学図書館所蔵のカンボジアに関する図書 (旅・遺跡関係)

- カンボジアの旅 (朝日新聞社)
- メコンの国旅行情報ノート (旅行人凱風社)
- インドシナ王国遍歴記 (中央公論新社)
- カンボジア：クメールの微笑と蘇る巨大遺跡 (近畿日本ツーリスト)
- アンコールの芸術 (今川幸雄)
- アンコール踏査行 (平凡社)
- アンコール・ワット：密林に消えた文明を求めて (創元社)
- アンコール・ワット (角川書店)
- 西欧が見たアンコール (連合出版)
- ベトナム アンコール・ワット：ブルーガイド (実業之日本社)